●せいてん質問箱

浄土の荘厳について

●質問●

浄土は本来さとりの場所ですから、私たちには相を描くことはできないとすると、きらびやかに説かれる浄土の姿は方便でしょうか。それとも真実の姿をそのまま写し出したものでしょうか？

□質問が含む問題

これは前号の問いにも関連することですが、この質問には私たちが誤解しがちないくつかの問題を含んでいます。

まず、仏のさとりということを私たちと切り離して考えてはいないかということです。仏のさとりの智慧は慈悲のはたらきとして衆生に届くものです。衆生にはたらくということは、かたちをとるということにほかなりません。親鸞聖人が『唯信鈔文意』に、

阿弥陀仏は光明なり、光明は智慧のかたちなりとしるべし　（七一〇頁）

と述べられているとおりです。

また、質問に「場所」とあるとおり、浄土は一つの世界として説かれます。私たちは場所や空間や世界ということをどのように考えるでしょう。たとえば『浄土論』にも浄土が「広大にして辺際なし」（七祖二九頁）と説かれますが、そのことを思うとき、あるいは果てしなく広がる大地を思い浮かべていないでしょうか。私たちは場所や世界について、そのような相でしか考えたり表現したりすることができません。

それから「私たちには相を描くことができない」とあるように、私たちは真実のありよう、すなわち実相を認識することができません。つまり、私たちの煩悩の眼は、対象を固定的な実体として認識し、それに執着します。つまり、煩悩に染まった眼でさとりの障礙となるようなありかた（染礙の相）でしか捉えることができないのです。経典や論書に浄土の荘厳相が説かれているのは、私たちにそのように認識せよといっているわけではないのです。

そして何よりも大切なのは、「方便」ということをどのように考えるべきかということです。もとより「方便」とは、衆生に向けられた仏のはたらきのことです。仏の慈悲のはたらきは真実の智慧にもとづくものであり、その具体的なはたらきが方便です。方便と真実とは切り離すことができないのです。

□浄土の荘厳相

一応このように整理した上で、あらためてお浄土の相がきらびやかに説かれているということについて考えてみたいと思います。

質問にあるとおり、まず浄土はさとりの世界です。浄土とは穢土に対する言葉ですが、穢土とは煩悩に満ちた世界ということですから、浄土とは煩悩に穢されることのない浄らかな世界ということもできます。そのことを表現しようとすると、どうしても美しく表現せざるを得ません。これはむしろ当然のことでしょう。加えて浄土は私たちが往生していく世界ですから、願生ということを考えるならなおさらです。

しかし、経典や論書を見ると、それが煩悩の眼をもって執着すべき世界として捉えられないように、細やかな配慮を持って表現されていることが判ります。

例えば『阿弥陀経』には、

また次に舎利弗、かの国にはつねに種々奇妙なる雑色の鳥あり。白鵠・孔雀・鸚鵡・舎利・迦陵頻伽・共命の鳥なり。このもろもろの鳥、昼夜六時に和雅の音を出す。その音、五根・五力・七菩提分・八聖道分、かくのごときらの法を演暢す。その土の衆生、この音を聞きをはりて、みなことごとく仏を念じ、法を念じ、僧を念ず。舎利弗、なんぢこの鳥は実にこれ罪報の所生なりと謂ふことなかれ。ゆゑはいかん。かの仏国土には三悪趣なければなり。舎利弗、その仏国土にはなほ三悪道の名すらなし。いかにいはんや実あらんや。このもろもろの鳥は、みなこれ阿弥陀仏、法音を宣流せしめんと欲して、変化してなしたまふところなり　（一一三頁）

とあります。つまり、浄土には色さまざまな鳥がいて、その鳥は仏法を説き述べ、浄土に往生したものをさとりへと導いているが、その鳥はいわゆる畜生ではない、これは阿弥陀仏の願心が鳥の姿を取ってはたらいているのだ、というのです。

鳥は通常は畜生に類しますから、特に念を入れて説明されているのでしょうが、鳥も仏法を説き述べているのは、その世界がまさしくさとりの世界以外の何物でもないことを示されているのです。鳥に限らず、浄土の相はみな阿弥陀仏の願心によって荘厳されているのです。

□方便のかたち

前号で阿弥陀仏が人格的に表現されることについて考えましたが、私たちがお仏壇やお内陣に安置する御本尊は、「方便法身尊像」といいます。それは経典に示された如来の姿を描かれているのですが、たとえば『仏説観無量寿経』の第九真身観には私たちが想像することすらできないほどの広大さをもって阿弥陀仏のお姿が示されています。もとより私たちの煩悩の眼をもって仏さまのお姿を私たちが描ききることなどできるはずはありません。第九真身観に示されるお姿は、私たちがどのように言葉で表しても、表しきることができないことを教えてくださっているともいえるでしょう。しかしもし阿弥陀仏の姿が何も示されないのであれば、私たちは私を摂め取り救い取ろうとしている存在のあることすら受けとめることができません。第七華座観に示される御本尊のお姿を「方便法身尊像」というのは、この仏が真実の智慧にもとづき慈悲をもって私を摂め取る仏であることを示しているのです。

浄土の荘厳相も同じです。私たちは経典に描かれる浄土のきらびやかさに目がいきがちですが、よくみればそこに描かれている浄土の相は、経典編纂当時の僧院などのありようを理想的に昇華したものとして、仏を中心にしたさとりの世界を表現していることがわかります。もし、浄土の相が何も描かれていなければ、私たちは、浄土が阿弥陀仏の願心にもとづき荘厳されたさとりの世界であることを受けとめることができません。

（本願寺派司教　安藤光慈）